

## 自分を伝え、相手を知ろう

「現代の国語」は、学校だけでなく、実社会や実生活のさまざまな場面で使える言葉の力を磨いていく教科です。そのために、自分はどうなことが分かっている必要があるか、何ができるようになるとよいのか、常に意識しながら学びを進めていきましょう。

## 学習のポイント

- ① 自分の言葉と向き合おう
- ② 相手とつながるインタビュー
- ③ 自分が目指す言葉の力

## インタビュー

インタビューは、相手に質問を重ねることによってさまざまな情報を手に入れる活動です。効果的に行うにはいろいろな技術があり、時には大変難しい活動です。しかし第1回の活動では、質問の作法やテクニクをどう身につけるかとか、メモはどう書きとめるかなどといった細かなことを気にする必要はありません。これから「現代の国語」を共に学ぶ相手はどんな人だろうという関心を持って耳をかたむけること！なんといってもこれが一番大事です。ごちこちなくなってもかまいません。

## 他己紹介

他己紹介で大切なことは、自分が紹介される立場になって言葉や構成を選ぶことです。だから「他者紹介」ではなく「他己紹介」と呼びます。もしも自分が相手だったら、どういふ点に気を付けてほしいか、どんな部分を強調してほしいか考えながら取り組みます。

そして、ユーモアたっぷりに他己紹介をしましょう。話を聞いている級友たちが「この人と一年間、一緒に学ぶのは楽しそうだ」と感じることが、他己紹介の目的です。そのためにはユーモア！これがたいへん重要です。

他己紹介に限らず、人とかかわる言語活動では、三つの大切なポイント、言い方を変えれば「心がけ」があります。それは「正確さ・適切さ・豊かさ」です。

「正確さ」…相手から示された情報を正確にとらえること。

「適切さ」…話の内容や要点を適切な言葉でとらえること。

「豊かさ」…話の内容や相手の印象を豊かにイメージすること。

こうした心がけを通して、「現代の国語」では、「自分を知る言葉」、「他者を知る言葉」、「世界を知る言葉」の充実を目指します。これらを通じた言葉の力と、それぞれの次元で磨くべき言葉の力を一緒に考え、身につけていきましょう。

エッセイ

聞き書きと違和感

藤森裕治

首都圏のとある町で、人々の昔の暮らしや伝承を本にするという企画が立ち、編集委員を頼まれたことがある。今では住宅団地や大規模ショッピングセンターが建ち並び、典型的なベッドタウンとなっているその町は、昭和三十年代までは広大な麦畑の向こうに牛舎が建ち並び、典型的な武蔵野の農村だった。

当時を知るお年寄りを訪ねて、あの頃の暮らしぶりを話してもらおう。「何もよそと変わったことはないが」と前置きをして、いきいきとした里山の春夏秋冬が語り出される。

「裏の丘陵にはタヌキやキツネがいてね。野良仕事が一段落した冬場に、五、六人の仲間をつかまえに行くんだ。やつらは丘をぐるぐる回るように動くクセがあつてよ。犬に追わせながら、通り道で待ち伏せすんのよ。」

「つかまえたタヌキやキツネはどうするんですか？」

「どうするも何も、隣近所の人も呼んでみんなで食うのさ。打ち立てのうどんや野菜を入れてタヌキ汁やキツネ汁にするんだ。うまいのなんのって。みんな喜んだっけなあ……」

こんなインタビューを重ねながら、当地の暮らしを手帳に書き留めていく。

現地に長く暮らす家々を訪問しての調査は、五年ほどかかった。おびただしい量の聞き書き資料が集まった。これらを整理し、執筆者を分担して『〇〇市史民俗編』という本にまとめる。私が担当したのは「生業文化」、つまり現地の人々の仕事や生活観について報告する章である。

原稿がおおむね出来上がったところで、インタビューに協力してくださった方々に目を通していただくよう、教育委員会の担当者にお願ひした。我ながらうまくまとめたことに自信をもっていたが、念には念を入れてという思いからだった。

数人の協力者から、思いがけない反応が返ってきた。

「書かれていることに嘘も偽りもない。だが、読んでみると自分が暮らしてきた村じゃあないような違和感がある。それが何だかうまく説明できないけれど……」

どうしてだろう？ 数はわずかだが違和感を覚えたという協力者のいることに、少なからず打ちのめされた。何がそう感じさせたのかを、一から考え直してみた。わからなかった。

しかたなく、インタビューに最も好意的に協力してくださったHさん宅を訪問し、この違和感についてお尋ねした。Hさんは、にこにこしながらこうおっしゃった。

「同じ村で暮らしていると言ったって、暮らしぶりはそれぞれ違います。どう書いたって、これは自分じゃないって言う人はいるもんです。いいじゃないですか、このままで。ここに書いてあるのは、あんたが何度も何度も足を運んで心に結んだ、この村の風景ですから。」

エッセイ

Hさんは、私の文章が、この町の昔のなりわいを客観的にあまねく報告したものであるというのである。そしてそれは不可能だとも。他者を紹介するとは、つまるところ紹介する自己が対象となる人や世界をどう見ているのかをさらけ出すことなのだ。大学時代、自分の故郷で民俗調査をするべきではないと言われた師匠の戒めの意味を、ふと了解した。

シラカシの生け垣に囲まれたHさんの屋敷を後にしたとき、ここちよいあきらめとある種の覚悟が、静かに私の心を包んでいた。それは、やわらかな覚醒のような経験だった。